

飯塚市教育研究所だより

TEL 0948-22-5500(内線 1635) Fax0948-29-5440

E-mail iikenkyu@city.iizuka.lg.jp

令和元年12月3日 文責 青木 宏親

飯塚市教育研究所研究員研究について

飯塚市教育研究所では、本年度8名の研究員が、筑豊教育事務所並びに飯塚市教育委員会の指導主事から指導を受けながら、教育実践研究を進めています。10～11月に第2回目の検証授業を行ない、11月28日(木)に研究所員の研究中間報告会を行いました。飯塚市の先生方の授業改善に役立つ研究をと頑張っています。各研究員の研究テーマを紹介します

<p>岡松 浩平 研究員 飯塚市立鯉田小学校</p> <p>主 題：比較して考えをまとめる子どもを育てる第3学年理科学習指導</p> <p>副主題：建設的相互作用を誘発させる学習活動の工夫を通して</p>
<p>大庭 美佳 研究員 飯塚市立片島小学校</p> <p>主 題：物事を多面的・多角的に考える子どもを育てる道徳科学習指導</p> <p>副主題：建設的相互作用を引き起こす協調学習を通して</p>
<p>和田 直子 研究員 飯塚市立飯塚鎮西小学校</p> <p>主 題：社会的な見方・考え方を働かせ、問題を解決する子どもを育てる社会科学習指導</p> <p>副主題：知識構成型ジグソー法による学習を通して</p>
<p>中村 友紀 研究員 飯塚市立穂波東小学校</p> <p>主 題：社会的な見方・考え方を育てる第6学年社会科学習指導</p> <p>副主題：建設的相互作用を発現させる学習活動を通して</p>
<p>遠藤 彰人 研究員 飯塚市立若菜小学校</p> <p>主 題：自ら考え、学び合う子どもの育成</p> <p>副主題：前向きアプローチの視点と子どもの思考の流れを意識した学習を通して</p>
<p>松野 健司 研究員 飯塚市立幸袋中学校</p> <p>主 題：伝えた内容について即興でやりとりができる生徒を育てる英語科学習</p> <p>副主題：「コミュニケーションカード」の活用を位置づけた交流活動の工夫を通して</p>
<p>福澤 佳奈 研究員 飯塚市立幸袋小学校</p> <p>主 題：書字や音読に困難のある児童への指導方法の研究</p> <p>副主題：アセスメント結果を基にした個別のトレーニングを通して</p>
<p>渡部 禎之 研究員 飯塚市立飯塚鎮西中学校</p> <p>主 題：通常の学級における特別な支援を要する生徒の書字能力を高める研究</p> <p>副主題：個別のアセスメントと学年教師集団の共通理解による支援を通して</p>

【中間報告会 令和元年11月28日(木)】

中間報告会では、一人一人緊張しながらもしっかりと発表できました。指導主事の指導助言を受け、最終報告会へ向けての決意を新たにしたいようです。

【最終報告会 2月27日(木)実施予定】



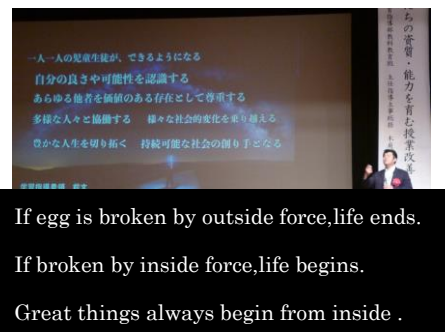
筑豊地区教育所連盟発表会が行われました。

8月8日(木)、田川青少年文化ホールで、令和元年度筑豊地区教育所連絡協議会教育実践発表会が行われ、飯塚市から50名の先生の参加がありました。基調講演「筑豊の子どもたちの資質・能力を育む授業改善」(福岡県教育センター 木庭 竜之助先生)の後、



小学校、中学校分科会に分かれて研究発表がありました。

飯塚市教育研究所からは、颯田中学校教諭 石川 直也先生に研究発表主題「現代社会における諸問題の解決に向けて構想する生徒を育てる社会科学習指導」～ルーブリックを活用したリフレクション活動を通して～について発表していただきました。基調講演にそった発表となり、参加者の評価を得た、これからの授業改善の参考になる発表でした。



福岡県教育研究所連盟研究発表協議会・九州地区教育所連盟研究大会が行われました。



11月14日(木)福岡県教育センターで、令和元年度福岡県教育研究所連盟研究発表協議会が行われました。飯塚市からは、28名の参加がありました。講演『学習指導要領全面実施に向けて～主体的・対話的で深い学びを実現するために～』(福岡教育大学教職大学院 特任教授 芋生 修一先生)の後研究発表が行われ、分科会Ⅲ(飯塚市教育研究所)で飯塚市立飯塚小学校教諭 桑岡 貴志先生に研究主題「社会事象の意味を考える子どもを育てる第6学年社会科学習指導」～社会的な見方・考え方を働かせる知識構成型ジグソー法による協調学習を通して～について発表していただきました。

また、11月22日(金)大分県教育センターでの九州地区教育所連盟研究大会でも第5学年社会科の実践発表をしていただきました。



教育研究所だより

(シリーズ：知識構成型ジグソー法による協調学習の授業づくり) <No1>

飯塚市が知識構成型ジグソー法による協調学に取り組み始めてから来年度（令和2年度）で10年を迎えることになりました。飯塚市内の全小中学校で知識構成型ジグソー法による協調学習の実践が今まで数多くの小中学校の先生方より取り組まれてきました。現在では、学校独自の知識構成型ジグソー法も出現しているようです。また、「知識構成型ジグソー法は面倒で難しい」「できない教科がある」「学力向上につながらない」「エキスパート資料は必ず三つ」「ホワイトボードは必ず使用する」などと誤った情報や批判的な声が多く聞かれるようになってきました。

知識構成型ジグソー法の実践が10年目を迎える節目に、東京大学のCoREFが提唱している内容や方法を今一度見つめなおすことが必要だと思います。

飯塚市の教育研究所では数年間にわたって研究員の先生方に「知識構成型ジグソー法による協調学習の授業づくり」について研究をしてもらっています。本年度も研究員の先生方の第2回目の検証授業が10月から始まりました。そこで、研究員の先生の授業を通して、子ども達の建設的相互作用が見られないジグソー法の型だけで終わっている授業からCoREFが提唱している授業づくりの基礎基本を示していきたいと考えています。

第1回目は、小学校社会5年生「自動車づくりにはげむ人々」（授業者：飯塚鎮西小学校和田直子教諭）の実践を通して、「ホワイトボード」の在り方について考えてみましょう。

本時は12/13で、課題は「20年後どんな自動車がつくられるだろう。その理由も考えよう」でした。エキスパート資料はA「安全（自動車保有台数の推移と交通事故発生件数の推移のグラフ）」、B「環境（二酸化炭素排出量のグラフと水素を燃料とする自動車）」、C「自動車に乗る人（乗る人のニーズを考えた複数の車種）」の三つの視点で作成されていました。

ジグソー活動では、エキスパートの報告だけをしてすぐにホワイトボードを取りにきた班は、ホワイトボードにA「安全な車」B「環境にいい車」C「障がいのある人も乗れる車」のような内容を羅列してこれが私たちの答で終わってしまいました。この班では建設的相互作用は見られませんでした。これは、「課題の答は3つのエキスパート資料に書かれていることを書けばいいんだ」と思っているからです。一方なかなかホワイトボードを取りに来ない班がありました。その班に対して授業者は「早くまとめなさい」とは言わず、「もっとたくさん話して。ホワイトボードは間に合わなくてもいいですよ」とアドバイスしたのです。

この授業者の一言が、この班に建設的相互作用を引き起こす要因の一つになりました。空飛ぶ車の提案があったり、その提案が無視されたり再度話題になったりと話が深まっていきました。「ああでもない」「こうでもない」と話し合っている時間は他の班よりも多かったです。沈黙もあり分からないという表情もあり、決して話がスムーズではありませんでした。

子どもたちの学びや対話記録等が詳細に記述された授業者の年度末の報告を是非ご覧いただき、知識構成型ジグソー法による深い学びを実感していただければ幸いです。

ジグソー活動ではエキスパート活動での報告をするために、ホワイトボードを Y 字に分けたり（エキスパート資料が 3 つの時）十字に分けたり（エキスパート資料が 4 つの時）したものを与えている学校もあります。区切られた、それぞれの箇所にエキスパート活動の資料を貼ったりエキスパート活動で分かったことを書いたりして、それを基にして「ああでもない。こうでもない」と議論することはとてもいいことです。しかし、区切られた箇所にエキスパート資料のキーワードや答えだけを書き、「この 3（4）つが答えね」という授業が数多く見られます（エキスパート資料の在り方については次号掲載予定）。これでは、考えを出し合ってよりよい答をつくる過程は学習者にも授業者にも見えません。

飯塚市がホワイトボードを使い始めたのは、ホワイトボードはいつでも消したり書いたりすることができるので、ジグソー班全員のメモ帳としてツールでした。時がたち現在は結論（答え）を書く（知らせる）ためのミニ黒板として使われているようです。

このような展開にならないために、ホワイトボードの在り方を原点に戻ってよく考えることが必要ではないでしょうか。以下ホワイトボードを使用する場合の留意点を示します。

○ホワイトボードは話し合いの結論だけしか書けないということを、学習者も授業者も認識しておくことが必要です。

⇨思考ツールとしては紙面が小さすぎます。

○初めからホワイトボードを与えないようにします。

⇨ホワイトボードが目の前にあるとすぐに書きたくなるものです。

○全部のジグソーグループの話（結論）がまとまったら一斉にホワイトボードを渡します。

⇨「答えがわかった班からホワイトボードを取りに来てください」と伝えれば、早く答えを書こうとします（班の競争）。最後は普段優秀と思われる子どもが自分の言葉で書いて「これでいいやろ」、他の子どもは「うん」と頷くジグソー活動になってしまいます。

○クロストークの時、いつでもホワイトボードを黒板に貼り、黒板の前に子どもを整列させる必要はありません。その場から発表させることもいい方法です。

⇨話し合い（発表し合い）は、見たり話したりする以上に聞くことが重要になります。

○指示棒などを使ってホワイトボードの文章をなぞらせるのは適切ではありません。

⇨重要なのは自分の班の答えを一字一句正確に伝えるのではなく、発表者が付加修正等をして発表できることです（なぜこんな答えになったかの理由を述べるのが大切）。

○ホワイトボードは必ず使用する必要はありません。

⇨モニター（聞き手）に聞く力が十分身に付いていれば、ホワイトボードを使用する必要はないでしょう。聞く力を育てるためにも、ホワイトボードの工夫をお勧めします。

文責：飯塚市協調学習マイスター 森山一昌

